

臻櫛韻の分韻過程と莊組の分布

遠藤光暁

1. はじめに

切韻系韻書において平聲の臻韻およびそれに相配する入聲の櫛韻は莊組聲母の小韻のみから成り、これは他の韻にはない特異な構成である。通説によると、臻櫛韻は眞質韻の莊組聲母小韻を獨立させたものであるとされている。そして、臻櫛韻が分立させられたのは、反り舌聲母の影響で介音が中舌的になったり主母音が廣めに實現されたこと⁽¹⁾による⁽¹⁾として説明されることが多かった。

その際、臻櫛韻が眞質韻と相補分布をなすことが議論の前提とされてきたのだが、これは精確な事實認識とは言えない。確かに眞韻と臻韻は聲母に関して相補分布をなす。だが、質韻にあっては第19小韻に“剗，初栗反”，第40小韻に“率，所律反”という莊組字が存在するのである⁽²⁾。櫛韻には初母開口小韻や生母合口小韻が存在しないから、依然として相補分布をなすのだと言えないこともないが、櫛韻が質韻から莊組聲母小韻を獨立させたものだとすると、なぜ質韻に莊組小韻がまだ残っているのか理解に苦しむところである⁽³⁾。また、震韻にも第19小韻に“櫛，楚觀反”という莊組小韻が存在するにもかかわらず、分韻させていないことも問題である⁽⁴⁾。

これらの例外の存在を音聲的な観点から説明することは困難に見え、それはひいては臻櫛韻の分立を純粹に音聲的な理由のみに歸因させる解釋に疑いを生ぜしめるものである。

この論文では臻櫛韻分立の問題に関連する諸現象を取り上げ、『切韻』の分韻過程の具體的解明への一つの足がかりとしたい。

2. 臻櫛韻分立の背景：先行韻書との関係

さて、『王韻』などに見える韻目下注によって既に知られているように、『切韻』の分韻は陸法言らの全くの獨創によるのではなく、先行するいわゆる五家韻書を比較検討しつつ定められたものである。そこで、五家韻書が如何に臻櫛韻の分立に關與しているかをまず見ておく必要がある。

臻韻の韻目下注には「無上聲。呂、陽、杜與眞同，夏侯別，今依夏侯。」とある。即ち、呂靜・陽休之・杜台卿は眞韻と同一韻としていたが、夏侯詠が別韻としていたのに従って陸法言らは臻韻を分立したのである。

ここまでは既にしばしば注目されてきたことであるが、では夏侯詠が臻韻を獨立の一韻として立てていたかというところではない。韻目下注を更に見ていくと、殷韻に「陽、杜與文同，夏侯與臻同，今並別。」とあり、これにより夏侯詠は『切韻』で言うところ

の臻韻を殷韻と同一の韻に含めていたことが知られる。

すると、臻韻の出自は眞韻であるとは限らず、『切韻』は夏侯詠に従って臻韻を分出したのだから、むしろ殷韻に由来する可能性の方が大きいと言える。こうして見ると、殷韻に相配する上聲の隱韻に“𪛗，初謹反”という莊組小韻が存在することも殷韻における夏侯詠の扱いと平行するものである。私は先に反切下字の根據に基づいて殷隱焮韻が主に夏侯詠『韻略』に由来すると推定したのだが⁽⁶⁾、ここにおいてそれを別方面から證する徴候が見いだされたこととなる。

以上を要するに、『切韻』の臻韻相当の小韻は呂靜・陽休之・杜台卿においては眞韻、夏侯詠においては殷韻と同一の韻に収められており、陸法言らが初めてこれを一つの韻として獨立させたことになる⁽⁷⁾。一般に『切韻』の分韻過程においては、先行諸韻書間で歸屬が異なる場合できる限りそれらを分立させている韻書に従うというのが方針となっていたかの如くであるが、ここでも歸屬関係を錯綜させるネックとなっている臻韻相当の小韻を分立することによって先行諸韻書間の最大公約數的解決を求めたものであるように思われる⁽⁸⁾。

一方、櫛韻に関しては韻目下注に「呂、夏侯與質同，今別。」とあり、呂靜と夏侯詠は質韻に含めていたものを陸法言らが分立させたことになる。この場合、殷韻と相配する入聲の迄韻には「夏侯與質同，呂別，今依呂。」と注されており、夏侯詠は『切韻』で言うところの質・櫛・迄韻を一韻としていたことが知られ、ここでは臻韻におけるような莊組小韻の先行諸韻書間での歸屬関係の齟齬は見られない。だから、櫛韻の場合は陸法言らが臻韻と平行するよう獨自に分韻を行なったのであろう。では、その際なぜ莊組小韻の一つ残らず櫛韻に分出しなかったのであろうか。

3. 質韻の層位

『切韻』には複雑な重層構造をなす韻が存在するのだが、それは複数の先行韻書から順に収載項目を取り込んでいったという『切韻』の成書過程を反映するものと思われる⁽⁹⁾。質韻もそのような韻の一つであって、今の問題もその層位の違いと関連する。

質韻は第1小韻から第16小韻までが開口韻母、第17小韻が合口韻母となっており、ここまでが第1底本に由来する層をなすものと考えられる。次に、第18小韻から第23小韻までが再び開口⁽¹⁰⁾、第24小韻から第26小韻までが再び合口となっており、これは別の底本(第2底本)から付け加えられた成分であるためこのように“開口・合口”からなる韻母群が再度現れたものであろう。質韻の莊組小韻の一つ“𪛗，初栗反”はこの第2層(第19小韻)に含まれている。同様にして、第27小韻が開口、第28小韻から第43小韻までが合口となっているのでさしあたりこれを第3層と見なし、開口の第44・45小韻を第4層と見なす。質韻のいま一つの莊組小韻“率，所律反”は第40小韻に位置している。こうして見ると、質韻中の莊組小韻は第2底本以下の層に含まれているのである。

さて、もしも現在に見られる質韻が全部完成した後でその中に含まれる莊組小韻を抜き出して櫛韻を立てたのであれば、一氣呵成に行なう仕事であるから取り残しが生ずるといふミスは起こりにくいであろう。だが、現實に莊組小韻に関する扱いが前後不一致になっている以上、上の状況をふまえて質・櫛韻が次のような段階を経て形成されたと

考えざるを得ない：

A) 現在の質韻の第1層の元となる第1底本をまず主層に据えた。

B) 次に、そこから莊組聲母小韻を取り出し、臻韻に倣って獨立させて櫛韻とした。

C) しかる後に、質韻の第2層以下を他の底本から取り込んだが、その際うっかりして當初の分韻原則を忘れてしまい、第2底本以下に含まれていた莊組小韻をそのまま質韻に入れてしまった、と。

複数の異質の底本から斷續的に收載項目を付け加えていく過程では、よほど注意していてもこのようなミスを完全に避けることは困難だと思われる。

4. 莊組（およびB類）小韻の韻内における偏在

臻櫛韻に關してはこの他震韻と隱韻に存在する莊組小韻の問題が残るが、それはのちほど扱うこととし、ここで臻攝以外で見られる類似例を先に見ておこう。實は、臻櫛韻のように獨立の韻として分立させるまでは至らないものの、莊組小韻が特異な扱いを受ける例は他にも少なくない。

時代は降るが唐・則天武后時代（690-704）の撰になる武玄之⁽¹²⁾の『韻詮』においては侵韻に相當する「琴」韻の他に「岑」韻が存在し、それが莊組を獨立させたものとする解釋が大矢透氏以來行われている。森博達氏は更に『切韻』において侵韻の莊組小韻が韻末に集中して配置されていることを見出し⁽¹³⁾、それに基づき『切韻』以前に岑韻を獨立させていた韻書が存在した可能性を示唆している⁽¹⁴⁾。

このように莊組小韻が韻内のある箇所に集中的に分布する例としては、このほか尤韻（第20-23小韻）、語韻（第15-18小韻）、麥韻（第6-8小韻、但し生母小韻は第2層に屬する第15小韻にある）、覺韻（第3-5小韻、但し初母小韻は最終の第19小韻にある）などがあり、また互いに相配關係のある嫌韻の第5-7小韻（但し生母小韻は最終の第10小韻にある）と洽韻の第4-6小韻（但し生母小韻は第9小韻にある）もそうである⁽¹⁵⁾。

侵韻の場合、相配する去聲の沁韻ではやはり莊組小韻が韻末に集中しているものの、上聲寢韻と入聲緝韻では莊組小韻の配置に條理を求めがたい、と森氏はしておられる。これは莊組だけに着目するとそうならざるを得ないのだが、『切韻』全體を見渡すと重紐B類と莊組が一緒になって韻内のある箇所（通例は韻末）に集中的に現れることがあり、侵寢沁緝韻はその典型的な例なのである。

侵韻では第17小韻から第22小韻までがすべてB類で、第23小韻から最終の第26小韻までがすべて莊組となっており、B類・莊組小韻は他の箇所には現れない。寢韻では第14小韻から最終の第23小韻までは大半がB類・莊組小韻となっている（但し第15小韻が泥母、第19小韻が從母となっており、ほかB類小韻は第3小韻にも現れる）。沁韻は反切下字の分布に基づいて第1層（第1-5小韻、反切下字「鳩」）、第2層（第6-11小韻、反切下字「禁」）、第3層（第12-13小韻、反切下字はこの2小韻間で互用）、第4層（第14小韻、反切下字「鳩」）にさしあたり分けられるが、このうち第2層は第8-11小韻を除くとB類・莊組小韻であり、第3層は莊組小韻のみからなり、B類・莊組は他の箇所には現れない。緝韻は第10小韻までは反切下字「入」が多用され、第11小韻以下（最終の第24小韻まで）は反切下字「立」が多用されるが、B類・莊組小韻は第11小韻以下のみにも現れる（但しこの層でも第

臻櫛韻の分韻過程と莊組の分布

12-14, 18, 23小韻に端組と心母小韻を交えている)。

このような現象は実は眞軫震質韻においても認められる。眞韻の韻末・第42小韻から最終の第49小韻まではすべてB類となっている(但しB類は他に第18・24・26・28小韻にも現れる)。軫韻ではB類は第19小韻を別にすると第6・8・9小韻に固まって現れる。また震韻でもB類は第11小韻を別にすると第17・18・20小韻に固まっており、ここでその間の第19小韻には問題の莊組(初母)小韻が来ているのである。質韻ではA類であるかB類であるか議論の餘地のある第27小韻を別にすると、B類は韻末の第39小韻から最終の第45小韻に集中して現れる。この部分でB類でないのは第40小韻のみであり、しかもここでもそれは莊組(生母合口)小韻なのである。

ある種の先行韻書においては『切韻』で臻韻に入れられている莊組小韻が眞韻と同一韻とされ(呂靜・陽休之・杜台卿), 『切韻』で櫛韻に入れられている莊組小韻が質韻と同一韻とされていた(呂靜・夏侯詠)わけだが、震韻と質韻にわずかながら存在する莊組小韻はその痕跡だと思われる。この場合、『切韻』では原則としては莊組小韻を臻櫛韻に収める方針をとっているため侵韻系⁽¹⁷⁾のようにB類と莊組小韻が同一箇所に置かれるという様相は系統的には見られないが、痕跡的な莊組小韻が位置する状況から推すと、『切韻』で言うところの眞韻系と臻韻系を同一韻に収めていた先行韻書においてはやはり莊組とB類をまとめていたであろうことが想像される。

ほか、莊組は関連しないものの重紐B類の小韻が韻内のある箇所に集中する現象も認められる。支紙寘韻のおのおの第1層⁽¹⁸⁾にはB類が多く含まれている。支韻の第3-7, 13-14, 16小韻(以上合口), 第18・20-23小韻(以上開口)はB類となっており⁽¹⁹⁾, 紙韻の第3-9小韻(合口), 第12-16小韻(開口)はすべてB類, 寘韻の第8-12小韻(合口ないし唇音)もB類となっている。また、至韻の第1層もそうであり, 第2・3, 8-12, 14・15小韻がB類である。前學の眞韻系とこのパラグラフで挙げた諸韻においては概略的に言って重紐の別が上古の異なる部に由来するわけだが、ここで見たB類の韻内分布の偏りは、『切韻』以前のある種の韻書⁽²⁰⁾においてそれらが別韻とされていたなごりであるか別韻に含まれていたものを取り込んだものである可能性がある。

類似例としてはこの他、職韻の第21小韻から最終の第28小韻まで(第25小韻は莊母)⁽²²⁾, 仙韻の第39小韻から最終の第47小韻まで(但し第42・43小韻は定母と來母), 談韻の第3-8小韻(およびそれと相配する鹽韻の第15-17小韻あたりと豔韻の第5・6小韻もそうか?)などにおいてB類が集中して現れている。

B類の小韻を別扱いにするという点で最も突出しているのは庚韻系であるが、この論文の主題の一つである莊組の扱いに關しても興味深い話題を提供するため次に節を改めて論じよう。

5. 庚韻系の場合

庚韻系は2等韻相当小韻と重紐B類からなり、このB類は清韻系のA類と對になるものであると目されている。『切韻』においてB類が重紐韻とは別に2等韻相当小韻と同一の韻に収められるのは他には見られない異例の扱いである。何故このような異例が生じたのであろうか。

ここでも『王韻』の韻目下注が問題を解くヒントを與えてくれる。庚韻・陌韻には注がないが、梗韻には「夏侯與靖同，呂別，今依呂。」，敬韻には「呂與諍、勁、徑同，夏侯與勁同，與諍、徑別，今並別。」とある。即ち，梗韻においては夏侯詠が靜韻と同一韻としていたが呂靜が別韻とするのに従って分韻し，敬韻においてはそれを單獨で一韻とする先行韻書はなかったが，陸法言らが（恐らくは梗韻に相配するよう）分韻したこととなる。ここで注目すべき點は梗韻（ひいては庚敬陌韻）を分韻する根據が夏侯詠にはなく，呂靜にあったことである。

『切韻』では2等韻を分韻する場合，一般に夏侯詠に依るのが通例である。だが梗韻に限っては夏侯詠がそれを獨立させていなかったため，呂靜に従って分韻を行なうこととなった。ここで庚韻系が例外的に2等韻相當韻母のみならず（『切韻』の全體の體例からすれば本來ならば清韻系に收められていることが期待される）重紐B類を含むのは，夏侯詠とは分韻原則の異なる呂靜の收載方針を受け繼いだためであろう。

この場合，「重紐」が韻部の別として保たれていることとなる。前節では韻内におけるB類（および莊組）の偏在の背後にそれらを別韻としたか別韻に含めていた先行韻書の存在を想定したのであるが，ここではそれが現實のものとして觀察されるわけである。

さて，この庚韻系において莊組小韻に奇妙な現象が見られる。それは，李榮氏が次のような表にして示した通りである（表1）：

表1

	庚	梗	敬	陌
莊				噴側陌
初	鎗楚庚		潮楚敬	柵恻載
崇	儉助庚			酢鋤陌
生	生所京	省所景		索所載

即ち，李榮氏が同所で言う如く，ここでは莊組が2等反切下字（庚陌）を取るものと3等反切下字（京景敬載）を取るものの二類に分かれるかの觀を呈しているが，それらは相補分布をなすため一類のみ認めるべきだといっているのである。そして，やはり2・3等韻母を一韻に含む麻韻系で莊組小韻がすべて2等反切下字を取っていることから李榮氏はこれらを一律2等韻相當のものとして扱っている。

これに先立ち，有坂秀世氏は「生」の小韻に關し上古の來源との關連において反切下字の指し示す如く拗音（即ち3等韻相當）であるとした。確かに，ここで3等反切下字を取っている小韻の「生・省・觀」及びそれらの小韻に所屬する字はいずれも上古耕部に屬し，上古陽部に由來するのが大勢である庚梗敬韻の中では異質的である。更に，周法高氏は『玄應音義』においても「生」の小韻の所屬字がやはり『切韻』と同じく「所京反」の如く3等下字を取っていることを見だし，カールグレンの『方言字彙』によると「生牲笙」や「省」を漢音ではseiとしていて，漢音では通例庚韻系2等を-oとし，3等を-eiとすることに照らすと，漢音は『切韻』や『玄應音義』がそれらを3等とするのに合致する，と述べた。有坂・周兩氏に従うならば，これらの字はやはり反切下字の示す如く3等相當であつたとすべきである。

臻櫛韻の分韻過程と莊組の分布

だが、入聲の陌韻について見ると、反切下字が2等であるか3等であるかは拘りなくほぼ一律に魚部入聲に由來し、しかも例外的に佳部入聲に由來する「噴」などはかえって2等の反切下字を取っているのである。ここでは李榮氏の解釋が妥當であるように思われる。では反切下字が2等と3等に分かれているのはなぜだろうか。

上のような音韻地位に沿って並べ直した表からは窺うすべはないのだが、ここで反切下字が2等字であるか3等字であるかは實は該小韻の韻内における位置と一定の關連を持っているのである。陌韻において、「戟」を反切下字とする「索」と「柵」の小韻は第6小韻「戟」に續いて第7・8小韻に現れる。ここまでが開口小韻で次の第9小韻は合口小韻となっており、以上が第1層に相當するものと考えられる。ついで「陌」を反切下字とする「噴」と「辭」の小韻が第10・11小韻に續いて現れる。この第2層では開口2等小韻は「陌」を単一反切下字としている。つまり、反切下字が2等字を取るか3等字を取るかは該小韻の位置する層に平行していることとなる。層の違いは異なる所據底本に由來するものと推定されるが、陌韻の出自となる先行韻書(複數)にあっては莊組小韻に2等下字を付けるものと3等下字を付けるものがあつたことにならう。そして『切韻』はそれらを統一することなく重層的に取り込んだものと解釋される。

陌韻におけるように莊組小韻が2等韻相當としても3等韻相當としても扱われ、しかもそれらが對立をなさない例が存在することは、『切韻』全體における莊組の分布に關してある種の洞察を與える。次節ではそれを見てみよう。

6. 韻類別に見た莊組の分布

『切韻』において、莊組小韻は2等韻と3等韻のいずれかに現れるが、3等韻での分布は著しく不均衡であつて、莊組小韻がほぼ滿遍なく出現するのは2等韻のない攝(即ち内轉系)の3等韻に限られ、2等韻のある攝(即ち外轉系)の3等韻では莊組がほとん

内轉系

表2

攝	果	止	遇	流	深	曾	宕	通
重紐韻	—	支(脂)	—	(幽)	侵	—	—	—
C類韻	<歌>	之<微>	魚虞	尤	—	蒸	陽	(東)<鍾>

外轉系

表3

攝	假	蟹	效	咸	臻	山	梗	江
重紐韻	—	(祭)	<宵>	(鹽)	(真)	(仙)	<清>	—
2等韻	麻	佳皆(夬)	肴	咸銜	臻	刪山	庚 耕	江
C類韻		<廢>	—	<嚴凡>	(殷)<文>	<元>	—	—

表例：平聲の韻目により相配する上去入聲をも代表させる。

ゴチック體……………莊組小韻が多く分布する韻系

普通體…………… 〃 少ない韻系

○で圍んだもの… 〃 僅少の韻系

◇で圍んだもの… 〃 全く存在しない韻系

—……………そもそも當該韻が存在しない場合

ど現れないか又は全く存在しない、という状況となっている。⁽³²⁾それを一覽表にしたものが前頁の表2,3である。

そして、外轉系の3等韻にある莊組小韻は同攝の2等韻の莊組小韻とほぼ相補的であり、對立することは稀であることが知られている。それを外轉系の3等韻としては莊組小韻がやや多い仙韻系に關して見ると次の通り⁽³³⁾(表4)：

表4

開口	刪	潛	諫	鎋	山	産	禰	黠	仙	獮	線	薛
莊	○	酢	○	○	○	醜	○	札	○	○	○	○
初	○	賤	鎋	利	○	剗	屨	鹹	○	○	○	荆
崇	○	賤	賤	○	○	棧	○	○	滌	○	○	○
生	刪	潛	諫	○	山	産	○	殺	○	○	○	穢
合口												
莊	○	○	○	○	○	○	○	○	陰	○	○	苗纂
初	○	○	纂	纂	○	○	○	○	○	○	○	○
崇	○	○	○	○	○	○	○	○	○	撰	撰	撰
生	○	○	撰	○	○	○	○	○	栓	○	纂	撰

ここで對立をなすかに見える場合でも、諫韻合口生母の「撰」は線韻合口生母に重出し、義注も諫韻では「双生子」、線韻では「一乳兩子」⁽³⁴⁾とあって意味差があるようには思われない。

また、鹽韻系では莊組小韻は葉韻に生母の「蕙、山輒反」があるのみであり、またその所屬字「蕙歌」のうち「歌」には「所洽反」の又音がある。

祭韻では、開口初母の「曩、楚歲反」、開口生母の「曠、所例反」(所屬字：鍛殺)、合口生母の「啍」などの莊組小韻があるが、このうち「鍛」は怪韻生母の又音があり、これ以外の莊組小韻は祭韻と怪韻との間で衝突することはない。

この他は(後加小韻を除き)外轉3等韻に莊組小韻が現れることはない(臻攝についてはすぐ後で検討する)。

ここで、前節で見た庚韻系の状況をいま一度想起しよう。庚韻系では莊組小韻が2等反切下字を取る場合と3等反切下字を取る場合とがあった。庚韻系の場合、たまたま重紐B類が2等韻相當韻母と共に一韻に收められていたためこのような現象が一韻内で現れたわけだが、2等韻が2等韻のみで獨立させられたとしたら莊組小韻に關する扱いの不揃いは韻を越えて2等韻と3等韻の間で現れるであろう。外轉系における莊組の分布状況は正にそのようにしてもたらされたものではないか。そして、陌韻の莊組小韻が反切下字に2等字を取るか3等字を取るかに拘りなく2等相當だと考えられるように、いま外轉系3等韻に見られる莊組小韻の中には本來は相應の2等韻に收載すべきところ、陸法言が先行韻書の收載にそのまま従ったために3等韻に入っているものが含まれている可能性がある。

さて、小文の第1主題である臻攝韻に關連する例外もそうした事情によってもたらされたものとする。いま臻攝韻以外の臻攝3等韻に散見する莊組小韻はやはり全て臻攝

韻に収めるか上去聲ではそれに相配する韻を立てるのが音理から言って統一的な処理方法であったらう。『切韻』でそうになっていないのは、莊組小韻に関して処理方法の異なる先行諸韻書の成分を一つの體系に完全に統合することを陸法言が徹底して行わなかったためだと考えられる。質韻の莊組小韻⁽³⁵⁾に関しては既に第3節で検討したが、震韻の莊組小韻も當初立てた分韻原則から取り残された結果、底本の收韻に沿ってそのまま震韻に置かれたものであろう。隱韻の莊組小韻も同様にして『切韻』にもたらされたものであろうが、この場合、等韻學的な術語で言うところの純3等韻に莊組が現れたことになり、『切韻』の音系に照らすと異例である。だが、第2節で見たように、臻韻の場合には他の先行諸韻書が眞韻に収めるのに夏侯詠のみはそれを駁韻に収めていたのであり、隱韻に莊組小韻があるのも夏侯詠の收韻方法だと推定される。だから、この異例は『切韻』音系の内部において決着をつけるべきものではなく、夏侯詠の段階まで繰り上げてしかるべきである⁽³⁶⁾。

ちなみに、問題の隱韻莊組小韻“𪛗，毀齒，初謹反”はこの一字のみから成り、この“𪛗”は『經典釋文』に二見する⁽³⁷⁾：「周禮・秋官司寇・朝士」の項には「初謹反。又勅謹反〔徹母隱韻〕。劉〔昌宗〕測吝反〔初母震韻開口〕。沈〔重〕創允反〔初母軫韻合口〕。毀齒也。」とあり、「左傳・僖公5年」の項には「初問反〔初母問韻〕。又恥問反〔徹母問韻〕。毀齒也。」とある。ここで「周禮」の項に出ている「初謹反」は、反切の字づらまで一致するから、『切韻』所収と共通の起源をもつ可能性がある⁽³⁸⁾。

但し、庚韻系の場合、舒聲では3等下字を取る莊組小韻は現實の音聲でも3等韻相當だった如くであるが、上で見た外轉系3等韻に存在する莊組小韻の中にも実際に3等韻相當の音價を持っていたものもあるようである。表4に擧がっている例のうち仙韻系の「栓・撰」などは日本漢音では「せん」であり、刪・山韻系の「刪・纂・山・棧・産；刹・札・殺」などが「さん；さつ」となっているのと對立する。これらの場合、ほぼ相補分布が見られるにも拘らず音價としては2系列に分かれるとせざるを得ないが、この現象に対する解釋は問題として残される。

7. 嚴凡韻系の問題

これまで見てきたのは、『切韻』において音韻地位が衝突するかに見える小韻があるからといって必ずそれらを共時的な音韻體系の上でのミニマルペアーと認めなければならないわけではない、ということである。このテーゼの應用例として嚴韻系・凡韻系の問題をここでついでながら取り上げておこう。

嚴・凡韻は相配する入聲では業・乏韻が立てられているものの、『切韻』原本においては嚴業韻に相配する上聲・去聲の韻が立てられていなかったことが『玉韻』などの韻目下注により知られている。そこで、『切韻』原本においては嚴・凡韻系の分布状況は次頁の表5のようになっていたと考えられる⁽⁴¹⁾。

ここで、嚴韻は牙喉音のみ、凡韻は唇音のみを含み、相補分布をなす。一方、それらに相配する梵韻は唇音と牙喉音を共に一韻に収めている。それならば、嚴韻と凡韻も對立するものではないのではなからうか⁽⁴²⁾。

だが、それらと相配する入聲の業韻と乏韻は嚴韻と凡韻にほぼ平行するものの、乏韻

表 5

	嚴	凡	范	梵	業	乏
幫 滂 並		芝匹凡 凡符芝	范 ⁽⁴³⁾	泛敷梵 梵扶泛		法方乏 乏房法
見 溪 疑 曉 影	攸丘嚴 嚴語翰 翰虛嚴 醜於嚴			劔舉欠 欠去劔 俺於劔	劫居怯 怯去劫 業魚怯 脅虛業 醜於劫	獨起法

には溪母小韻が含まれ、業韻と衝突する。ミニマルペアーの存在はたとえそれが一對だけでも音韻對立の判定にあたっては決定的意味を持つが、兩韻の間の對立語例は後世の切韻系韻書においては更に増加している。そこで、『切韻』が現實の共時的音韻體系を如實に反映するものであるとする限り、嚴韻系と凡韻系とはやはり韻母が異なるものとして扱わざるを得ないのである。

だが、嚴韻系と凡韻系の分布状況の全體から見ると、それらが韻母として對立していたにしてはそれぞれの韻系の結合可能な聲母が著しく偏っている。そして、『切韻』原本の段階で存在したと思われる最小對立例は乏韻と業韻の溪母小韻一つのみであり、ここで乏韻の溪母小韻字“獨”は僻字であって（この小韻はこの一字のみから成る）、それが現實の言語に存在した真正の對立例であるとするには基盤が弱いように思われる。

カールグレン『方言字彙』⁽⁴⁴⁾によると、嚴韻系と凡韻系は吳音と高麗音では同韻母であるが、その他の諸方言・域外漢字音では例えば「嚴」北京-ien・漢音-en, 「凡」北京-an, 漢音-anの如く異なる韻母となっている。しかし、これは唇音音節が輕唇音化を経る際に拗介音を失った結果もたらされた違いであり、現に輕唇音化を經ていない吳音と高麗音では同韻母のままである。また、漢音やその他の現代諸方言音のような状態が『切韻』の段階に既にあつたため嚴韻系と凡韻系が分韻されたとすることもできない。それは現代音に見られる嚴韻と凡韻の韻母の違いは梵韻の牙喉音小韻と唇音小韻の間にも正に平行する形で認められるからである。一方、上古來源から言っても、嚴韻系と凡韻系は共に談部・業部入聲に由來する。

ちなみに、業韻と乏韻が分韻された根據は乏韻の韻目下注に「呂與業同，夏侯與合同，今並別。」とあり、この場合も臻韻のケースと同じく、先行韻書が乏韻相當小韻を別々の韻に歸屬させていたため分けたのであって、必ずしも音價が異なっていたとしなければならないわけではない。

更に、切三(S2071)の止韻・「似」小韻に所屬する「汜」の注には「又符嚴、敷劔反。」という又切がついており、それらは「汜」の音だと考えられる。ここで、平聲の「符嚴反」は「凡，符芝反」に相當し、現に王二や『廣韻』では「汜」がこの小韻に存在する。すると、この又切からしても「嚴」と「凡」が同一韻類だということになる。⁽⁴⁵⁾

以上のような諸々の徴候からして、嚴韻系と凡韻系は對立するものではないと考えてよからう。

これまで凡韻系は嚴韻系に對する合口だとされることが多かったが、切韻音系においては韻尾-m/p と介音 -u- は共起しないのが原則であるから難點がある。三根谷徹氏のように嚴韻/iam/, 凡韻/iam/ の如く推定すればその點は解決するが、そもそも兩韻系が對立しない以上、共に *iam/p の如き韻母をもっていたとしてよいと考える。

なお、『切韻』に先立ち『玉篇』においても嚴韻と凡韻の反切下字が系聯する。また『切韻』とほぼ同時期の資料である『毛詩音』においても同様である。ほか、ある種の切韻系韻書によって作られた『説文解字篆韻譜』十卷本でも「凡」に「符嚴反」という反切が付され、嚴韻と凡韻が一韻に合せられている。⁽⁴⁶⁾ こういった現象はこれまで「嚴韻系と凡韻系の合流」として理解されてきたが、そもそも兩韻系がはなから對立したことがないのであればそのような音韻變化もなかったこととなる。

8. おわりに

小文では臻櫛韻を始めとして庚韻系・清韻系、嚴韻系・凡韻系などの分韻過程において、諸先行韻書間の歸屬關係の處理という非音聲的側面がかなり大きく關與していることを見てきた。

このことは必ずしも音聲的理由を全く排除するわけではない。臻櫛韻の場合、apicalな反り舌聲母と dorsalな i 介音とは舌尖の状態からして直接連接することは不可能であって、音聲的には必ずや apicalな i の如き渡り音を伴った筈であり、それは後續の母音の音價に何ほどかの影響を與えてもおかしくはない。だが、それはあくまでも外部の觀察者にとって察知される音聲的な現象なのであって、それらが音素として分化していない限り native の categorical な音認識にあっては把握しがたいものであろう。客觀的にいかに音聲相が離れていてもそれらが音韻對立をなさない限り native speaker というものは自分の母語にある結合變異形の音相の違いに對してまるで鈍感なものである。

かつてカールグレンが『廣韻』で開合で分韻する場合としない場合があることを説明するために現代方言での反映をも引きながら合口介音に強い母音性の u と弱い子音性の w の 2 種を立てたことがあった。⁽⁴⁷⁾ だが開合で分韻するか否かはそもそも『廣韻』とそれ以前の切韻系韻書では状況が異なり、また現代方言の根據も危うく、音韻論的にもそれらが對立をなさないことから、やはり 1 種の介音のみを再構するのが定説となっている。⁽⁴⁸⁾ これは、韻書における韻の分合を音價再構の決定的根據となすことができない好例であった。

そこで、臻櫛韻に對しても眞韻系と同じ *ien/t を推定して構わないものとする。⁽⁴⁹⁾ また、庚韻系が 2 等韻相當韻母と重紐 B 類を含むのは呂靜の分韻原則を承けたものであって、陸法言自身や當時の標準音では庚韻系の重紐 B 類が清韻系と同一で庚韻系 2 等とは異なる韻母を持っていた蓋然性も小さくない。

以上を要するに、『切韻』の構成を解釋するに当たっては、すべて音聲的理由によって決着をつけなければならないとは限らず、複数の異質の底本の要素が完全に統合されなかったために不統一になっている可能性も考慮する必要がある。

注

- (1) 中古音研究の開拓者であるカールグレンはこの問題に對して態度を數度變えている。趙元任・高本漢「關於臻櫛韻的討論」『歷史語言研究所集刊』1:4, 487—488頁, 1930年; 高本漢著, 趙元任・李方桂・羅常培譯『中國音韻學研究』507頁譯注一, 706頁譯注一, もと1940年, 臺灣商務印書館, 1982年を参照。なお, Bernhard Karlgren, *Compendium of Phonetics in Ancient and Archaic Chinese*, *Bulletin of the Museum of Far Eastern Antiquities*, 26, p. 257, 1954では臻櫛韻を -jen, -jet, 眞質韻を -jĕn, -jĕt と推定しており, これがカールグレンの最終案だと思われる。ほか, 河野六郎「玉篇に現れたる反切の音韻的研究」もと1937年, 『河野六郎著作集』2所収, 平凡社, 1979年, 148頁; 藤堂明保『中國語音韻論』, 江南書院, 1957年, 195—6頁(新版, 光生館, 1980年, 226—7頁); E.G. Pulleyblank “The Consonantal System of Old Chinese” *Asia Major*, 9:1, p. 73, 1962; 周法高「論切韻音」『香港中文大學中國文化研究所學報』1, 表1, 1968年(周法高『中國音韻學論文集』所収, 中文大學出版社, 1984年); 三根谷徹「唐代の標準語音について」『東洋學報』57:1/2, 04頁, 1976年; 平山久雄「中古音重紐の音聲的表現と聲調の關係」『東洋文化研究所紀要』73, 29—31頁, 1977年; 龍宇純「從臻櫛兩韻性質的認定到韻圖列二四等字的擬音」『歷史語言研究所集刊』54:4, 1983年なども臻櫛韻に對して眞質韻とは異なる音價を推定している。
- (2) この點は E.G. Pulleyblank, *Middle Chinese: A Study in Historical Phonology*, The University of British Columbia Press, 1983, p. 218 で既に指摘されている。またここでの小韻の通し番號は上田正『切韻諸本反切總覽』, 均社, 1975年のもので, 以下でも陸法言由來の小韻および反切の認定を同書の推定に據る。
- (3) 平山久雄「敦煌毛詩音殘卷反切の研究(中の1)」『東洋文化研究所紀要』78, 1979年, 42頁は, 合口韻母においてはA類・AB類(莊組を除く)が(『廣韻』の)諄術韻, B類・莊組が眞質韻に分かれるとし, 『切韻』の清昔韻と庚陌韻の分布と同じ音韻的條件に従うものとする。これにより質韻の合口の莊組小韻の存在が説明できたとしても, 開口の莊組小韻は依然として例外として残される。
- (4) この點は現代では注1所引の高本漢の1930年の文以來しばしば指摘されており, 又これに先立って戴震『聲韻考』(音韻學叢書本, 卷2, 2a·5a)では既に隱韻の莊組小韻と共に臻櫛韻に相配するものとして扱われている。
- (5) 震韻にはこの一小韻しか存在しないのだから, 詩作の實用上の目的からするとこれを獨立させることは無意味だという事情も考えられる。だが, 范韻のように一小韻しかなくとも他聲調と相配するよう獨立させられている例もあるのだから, 依然として疑問は残るのである。
- (6) 遠藤光暁「『切韻』反切の諸來源—反切下字による識別—」『日本中國學會報』41, 1989年, 第5節参照。
- (7) その際, 陸法言(ら)は反切下字が臻韻内部で自足するよう用字を差し替えたであろう。この點は櫛韻に關しても同様である。
- (8) 陸志韋『古音說略』, もと1947年, 『陸志韋語言學著作集』, 1, 中華書局, 1985年, 50頁は既に「臻櫛韻の字在某種方言讀成 tʃiən, tʃiət 等, 屬於殷韻系, 在別的方言讀成 tʃiĕn, tʃiĕt, 屬於眞韻系。那末, 陸法言不能不把他們另列一系了。」と言い, やはり異なる體系の間の調和を圖るための折衷策として臻櫛韻を獨立させたものとしている。但し, 陸志韋氏はその違いを陸法言が現實に觀察した方言音に基づくものと考えておられる如くであるが, 私見では先行韻書間の齟齬を單に文獻的に處理したのであってもよいと考える。
- (9) 遠藤光暁「『切韻』小韻の層位わけ」『青山學院大學論集』30, 1989年参照。

臻櫛韻の分類過程と莊組の分布

- (10) ただし第22小韻は“蜜，民必反”，第23小韻は“必，卑吉反”の如く唇音聲母であり，唇音が開・合のいずれに属すかは難しい問題であるが，ここでは第23小韻が反切下字に開口字をとっていることから，第23小韻までが開口韻母群をなすものとする。ちなみに，これら2小韻はいずれも重紐A類であるが，『切韻』においては唇音の重紐A類は開口韻母群，重紐B類は合口韻母群に位置する傾向が認められる。この点については別稿で詳論したいと思う。
- (11) なお第4節において更に別解を提出する。
- (12) 上田正『切韻逸文の研究』，汲古書院，1984年，514頁参照。
- (13) 森博達「武玄之『韻詮』の岑韻について」『同志社外國文學研究』33・34，1982年，85頁；ほか頼惟勤「中古中國語の内・外について」もと1958年，『頼惟勤著作集Ⅰ中國音韻論集』，汲古書院，1989年，252頁参照。
- (14) 注13所引論文第4節参照。また上田正『切韻諸本反切總覽』が陸法言由來と推定する侵韻第27小韻が陸法言以降の増加小韻であることも同所で考證されている。
- (15) なお，この韻の冒頭部分は第1・2小韻が牙音，第3・5小韻が齒音，第6小韻が舌音，第7・10小韻が唇音，の如く調音點が奥から前の順に配列されている。
- (16) この場合，臻韻の第2小韻が定母となっているのを除くと，兩韻の小韻は冒頭から「匣・溪・見・崇・莊・初」の順に揃っている。ついでながら，姥韻と暮韻も透母が姥韻では第2小韻，暮韻では第5小韻にある他は冒頭が「明・定・來・端・見」の順に揃っている。類似例は頼惟勤『『切韻』について』（もと1974年，注13所引書所収）に多く指摘されている。
- (17) 平聲の韻目の後に「系」を付けて四聲相配する韻をも合わせて指すこととする。以下同。
- (18) 「層」の概念については注9所引論文を参照。
- (19) ここでA類となっている第17小韻および第19小韻はそれぞれ第16小韻および第18小韻と重紐の類別が異なるだけのミニマル・ペアとなっており，それらは音韻對立をなすかをチェックするために隣接箇所に挿入したものであろう。なお第18小韻冒頭字「奇」・第19小韻冒頭字「祇」は，『顏氏家訓』「音辭篇」に「岐山當音爲奇，江南皆呼爲神祇之祇」とあるのと一致し，何らかの繼承関係がある可能性もある。ちなみに「岐」は，切二では「奇」の小韻に收められていないものの，「祇」の小韻で「山名。又渠羈反（即ち「奇」と同音）。」として收められている（他の各本も同様）から，『切韻』原本では兩小韻に兼收していたのであろう。
- (20) 頼惟勤「中國における上古の部と中古の重紐」（もと1957年，注13所引書所収）を参照。
- (21) 支韻第1層は呂靜『韻集』に由來するものと推定され（注9所引論文第3節を参照），紙寅韻第1層も恐らくそうであろう。
- (22) これは平山久雄「切韻における蒸職韻開口牙喉音の音價」『東洋學報』，55：2，1972年，第7節で既に指摘されている。
- (23) 周祖贖「切韻的性質和它的音系基礎」もと1963年，『問學集』上冊，1966年，第2節の校訂に従い引用した。
- (24) 韻目下注において「靖」となっている点については議論が必要だが，ここではちいらない。なお注6所引論文の注12も参照。
- (25) なおこれとは別に，注1所引平山論文（31—32頁）は，梗攝の喉音韻尾には『切韻』の時代あるいはそれ以前から口蓋化する傾向が潜在していたとするならば，口蓋的な調音特性を含む聲母の後ではそれがより顕在化しやすく，そのような口蓋的韻尾と拗音とに挟まれた場合主母音がより狭く實現し，そのため清韻系と庚韻（3等）系が分類されたと想定している。
- (26) ただし，庚韻系と清韻系に跨る「重紐」は庚韻系<陽部・魚部入聲，清韻系<耕部・佳部入聲の如く異なる上古韻部に所屬する場合は多いとはいえ，耕部・佳部入聲に由來する庚韻系

- の字も少なくない。董同龢『上古音韻表稿』、もと1944・1948年、臺聯國風出版社、1975年の相當箇所を参照。
- (27) 『切韻音系』、中國科學院、1952年、95頁。但し王三の敬韻生母小韻は後加のものであるからここでは掲げない。
- (28) 「先秦音の研究と拗音的要素の問題」もと1940年、『國語音韻史の研究・増補新版』三省堂、1957年、366頁。
- (29) 「玄應反切考」もと1948年、『中國語言學論文集』聯經出版事業公司、1975年、232頁。注28・29所引の論の存在は注3所引論文42頁により知ることを得た。
- (30) 注9所引論文参照。
- (31) ちなみに庚韻では、「庚」を反切下字に取る「鎗」と「倫」の小韻は第11・12小韻に續けて現れ、「京」を反切下字に取る「生」の小韻はそれとは離れて第24小韻に現れる。そして前者は第8小韻以下（第12小韻まで、または第13小韻を飛ばして第14小韻まで）すべて「庚」を反切下字とする箇所位置し、後者は第23小韻から第26小韻に至る反切下字を「京」とする箇所に位置している。そして、兩小韻群はやはり別層に屬するものと推定される。また硬韻では、莊組小韻は「省」の一つしかないが、反切下字は「景」となっており、やはり3等韻相當の第2・4小韻（開口）、第6・8小韻（合口）の間の第5小韻に位置する。だが敬韻では「敬」を反切下字とする「漚」の小韻は第15小韻にあり、その前後の小韻は2等韻相當となっていて、小韻の韻内分布とは特に連關が見られない。
- (32) この點は注26所引書の22頁の(2)で既に指摘されている。
- (33) 注26所引書20-28頁の議論を参照。なお、下掲の表は同書25頁の表に倣って作成した。表中では刪・山韻に關しては小韻筆頭字のみを掲げ、仙韻に關しては小韻所屬字を全て掲出した。但し後加小韻・字は掲げない。なお『切韻』原本由來字の判定については、いま暫く李永富『切韻輯畧』、藝文印書館、1973年の推定によっておいた。
- (34) ちなみにこの義注は『説文』に由來する。『切韻』原本の成立に『説文』が關與しているか否かは未決の問題であるが、もし『切韻』の編纂にあたり『説文』を系統的に参照していたならば後世になって長孫訥言などが『説文』を元に増補する必要も餘地もなかったのではないか。また、線韻（諫韻も）では初期のテキストが残っておらず、王二・王三・唐韻・廣韻しか見ることができないから、あるいは線韻の方の「驛」は後加字であるかもしれない。
- (35) 周知のように、『切韻』の編纂は大きく言うと開皇初の分韻原則の決定と仁壽元年の本編纂の2期に亙っている。
- (36) その場合、夏侯詠の方言では問題の莊組小韻が殷韻系と同じ韻母で發音されていたかもしれない。つまり、注8所引書の想定は夏侯詠の段階まで持ち上げれば成り立つかもしれないということである。
- (37) 潘重規『經典釋文韻編』、臺北、國字整理小組、1983年序、1164頁参照。
- (38) 問韻は焮韻の合口にあたり、唇音小韻は焮韻との間で對立をなさないから、ここでの反切下字「問」は焮韻相當の音を表示するものである可能性もある。
- (39) なお段玉裁は、これらの類の音は聲符（但し「亦聲」）を“七”と誤認してこしらえられたものであり、本來はこれは“七”であって、『玄應音義』が「舊音」として引く「差貴切」が正しい、とする（『説文解字注』「訛」の項を参照）。
- (40) 『經典釋文』と『切韻』が直接の繼承關係を持つか否かは重大問題であるが、少なくとも今の場合のように夏侯詠なり他の音韻資料を介して共通の來源から資料を共に受けついでいることは充分あり得よう。なお、王一・王二・王三・『廣韻』では“訛”を震韻の“櫛、楚覲反”

臻櫛韻の分韻過程と莊組の分布

- の小韻にも収めるが、S 6176には見えないため注33所引書はこれを陸法言由來と認めない。但しS 6176は該小韻の所屬字を「四」とするのに實際は三字しかないから、「四」が誤寫でない限り）書寫時に一字脱したものと思われ、それが“𪛗”である可能性もある。この音は『經典釋文』所引の劉昌宗のものと同音である。
- (41) 表の體裁は注 27 所引書、72 頁の表に倣うが、所掲小韻と反切用字は上田正氏推定の『切韻』原本のものによる。
- (42) 該韻にはこの小韻しかなく、反切が付けられないため、「無反語、取凡之上聲。」とある。
- (43) Mantaro J. Hashimoto, *Phonology of Ancient Chinese*, Vol. 1, Study of Languages & Cultures of Asia & Africa Monograph Series No.10, 1978, pp.59-62 (もと1965年) は既にその可能性を問題にしているが、結論的にはそれらが對立を成すものとしている。
- (44) 注 1 所引の高本漢1940所收。
- (45) この點は古屋昭弘氏の教示による。同氏の「王仁昉切韻と顯野玉篇」『東洋學報』65:3・4, 172頁も参照。なお、止韻の方に出ている切三の又切は『切韻』原本に遡る公算が強いけれども、切三や王一・王三では凡韻に「汎」が見えず、この又切が宙に浮いた形となっている。だが、『切韻』原本がすみずみまで無矛盾であったとは限らず、このような不統一が原本の段階から既にあったとしても構わないであろう。
- (46) 「中古漢語の韻母の體系」『言語研究』31, 1956年。
- (47) 周祖謨「萬象名義中之原本玉篇音系」もと1936年、『問學集』上冊, 348頁, 中華書局, 1966年; 河野六郎「玉篇に現れたる反切の音韻的研究」もと1937年、『河野六郎著作集』2, 平凡社, 1979年, 119頁を参照。
- (48) 平山久雄「敦煌毛詩音殘卷反切の研究(中の6)」『東洋文化研究所紀要』105, 19-20頁, 1988年。
- (49) この點は五卷本にも受け継がれている。但し、入聲では業部に「乏部附」とあるのだが、何故か乏韻字は馮桂芬の模刻本では缺けている。上聲と去聲で嚴・業韻に相配する韻が立てられていないのは王仁昉がそれらを立てる以前の系統を引く切韻系韻書に基づいたことを示し、興味深い。ちなみに、去聲では陷部に「鑑, 泛[梵韻に相當]部附」として梵韻字が収められているものの、反切上は梵韻内で自足して他韻に互ることはない。
- (50) もと1919年, 高本漢『中國音韻學研究』, 1940年, 462-466頁。
- (51) Yuen Ren Chao, "Distinctions within Ancient Chinese", *Harvard Journal of Asiatic Studies*, 5, 1940, p. 215ff.
- (52) これは注 1 所引高本漢1930年の結論と同様であり、それ以後にも割合ふつうに見られる推定である。
- (補) 第五節に關連して佐々木猛「庚清韻贅說」『伊地智善繼・辻本春彦兩教授退官記念中國語學・文學論集』, 東方書店, 1983年を引用すべきであった。校正に際し補なう。